

氏名	安原 成美
ヨミガナ	ヤスハラ シゲミ
学位の種類	博士（文化財）
学位記番号	博美第518号
学位授与年月日	平成28年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 旧祥雲寺客殿障壁画の復元研究 — 国宝「松に黄蜀葵及菊図」智積院蔵の想定復元模写を中心として— 〈作品〉 国宝「松に黄蜀葵及菊図」智積院蔵の想定復元模写

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	荒井 経
（論文第1副査）	東京藝術大学	客員教授		有賀祥隆
（作品第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	宮廻 正明
（副査）	東京藝術大学	非常勤講師		國司 華子
（副査）	東京藝術大学	非常勤講師		京都 絵美
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	藪内 佐斗司

（論文内容の要旨）

本研究は、智積院蔵国宝「松に黄蜀葵及菊図」（以下本図と略す）について、旧祥雲寺客殿の障壁画として制作された当初の画面構成と寸法で、想定復元模写を制作するものである。そして、本図の想定復元模写と他の旧祥雲寺障壁画を合わせて、旧祥雲寺客殿内部の障壁画の配置について再検証を行う。

本図は、智積院の前身である祥雲寺客殿の障壁画として描かれた。祥雲寺は天正19年（1591）愛児・鶴松（棄丸）の菩提を弔うために豊臣秀吉が創建した禅宗寺院で、その中核をなす客殿の規模は、従来の禅寺のそれをはるかに超えていたが、天和2年（1682）7月の護摩堂から発した火災で灰塵に帰してしまう。その際、幸いにも障壁画の主要部分は持ち出され焼失を免れる。焼失を免れた障壁画は、再建された客殿や大書院などの障壁画に転用された。その後、明治25年（1802）の盗難や昭和23年（1947）の火災で、更にその一部が失われたと考えられる。

本図は昭和の火災後に再建された大書院の南廊下に置かれていたが、現在は智積院の宝物館に収められている。床貼付の形態であるが、画面右下方に引手の跡があることから、本来は襖絵であったことがわかる。また、松樹上部の金雲を境に、図柄が完全に分離しており、紙継ぎした後に金雲を上から貼り付けてあることが確認できる。このことから、襖絵から床貼付に変更する際に、本来は別々であった絵が上下に継がれてしまったことなどが想像できる。宝物館の障壁画以外にも、本図の一部と考えられる障壁画が存在する。智積院の境内にある宸殿の違棚に貼り付けられている障壁画である。松の根元に芙蓉などが群生するこの絵は、画題だけではなく、その画質や図柄が本図と共通していることが認められる。

智積院障壁画復元研究は、昭和38年1月に「國華」第850号（以下「國華」）で、山根有三氏らによって行われた<sup>1</sup>。智積院障壁画に関する研究では、現在までのところこれが最も詳細で、ことに現状を可能な限り復元して旧祥雲寺の原状に近づける試みにおいて、研究の基礎を固めるものであった。

平成4年に祥雲寺客殿遺構が京都埋蔵文化調査センターによって発掘調査され、平成8年に発掘調査の成果

<sup>1</sup>昭和三十八年一月発行の「國華」第八五〇号において、『智積院障壁画の研究』を編集し、田中一松、米澤喜園、吉沢忠、山根有三、水野比呂志、辻惟雄からなる障壁画研究会が中心になって調査研究を行い、その共同意見を発表した。

と旧祥雲寺客殿の復元図が発表された<sup>2</sup>。その後、旧祥雲寺客殿の部屋割りと、それに対する障壁画の配置についての復元研究も行われた<sup>3</sup>。しかし、これらの研究はすべてが建築平面に対する障壁画の復元研究であり、障壁画自体の復元研究は「國華」以降行われていない。遺構の発掘調査から、客殿の規模についてはある程度判明しているが、母屋内部の部屋割や障壁画の構成に関しても明確な結論が得られていない。これは、研究の基となる客殿障壁画自体に、寸法や構図、枚数など曖昧な点が多いことに起因していると考えられる。

そこで筆者は、現存している障壁画自体の正確な復元を行い、それを基に再検証することで、祥雲寺客殿障壁画の全貌を明らかにすることができるのではないかと考えた。

この障壁画自体の復元から、それが収められている建造物の内部空間を検証する方法は、実技を基盤とした研究で初めて可能となるものである。本研究は、祥雲寺客殿研究に絵画自体の復元という立場からひとつの結論を提示しようとするものである。

本図の復元を進めるに当たり、平成25年に智積院において、熟覧調査と高精細撮影を行った。この調査で、先行研究で指摘されていた改変跡を確認するとともに、新たに複数の改変跡を発見した。

調査と想定復元模写を通して、智積院に客殿衆入間床貼付絵と宸殿違棚貼付絵として伝わってきた本図は、制作された当初は6枚以上で構成された襖絵であり、そのうちの3枚が改変されたものであることが明らかになった。さらに想定復元模写を制作したことで、旧祥雲寺客殿の内部構成と障壁画の配置位置について具体的な検証が可能となり、本図は、客殿室中の西面に配されていたことが判明した。これらの結果が視覚的に提示され、本図を含む旧祥雲寺客殿障壁画が、巨大樹による大空間の構成と草花の息吹や風による場面の劇的な変化など、独自の表現で室内を壮大に演出していた様子が明らかになったのである。

#### (論文審査結果の要旨)

本論文は、京都・智積院蔵の前身である祥雲寺すなわち豊臣秀吉が天文19年(1591)に愛児鶴丸(兼丸)の菩提を弔うために創建した大きな禅寺の客殿障壁画のうち現存する国宝25面附26面のうち長谷川等伯筆とされる「金地著色松に黄蜀葵及菊図床貼付4面」(以下「本図」)を取り上げ、制作された当初の画面構成と寸法で想定復元し、旧祥雲寺客殿の内部(室中)の障壁画の配置について再検討を行った経緯を論述したものである。

論文は、序章・障壁画復元の意義、第1章・智積院障壁画概説、第2章・「松に黄蜀葵及菊図」の復元—作品調査を中心として—、第3章・「松に黄蜀葵及菊図」の想定復元模写、第4章・旧祥雲寺客殿と障壁画の構成、終章・想定復元模写を通して得られた成果の5章で構成される。

現在、本図は床貼付の形態をとるが、画面右下方に引手の跡が認められることから、本来は襖絵であったことは明らかであるが、想定復元模写を原寸で制作するには襖絵1枚の正確な寸法を特定する必要から、紙継寸法と引手位置から高さ229.7cm、幅166.7cmと算出し、また画面の位置関係は金箔1枚の寸法を測り(縦・横10.0~10.5cm)、しかも金箔が整然と貼られている貼り方から確定する。次に客殿の部屋割りについては、遺構の発掘調査結果や建築史家の検討から6室形式が提唱されているのに対して、論者は絵を画く立場から室中に当る部屋が大き過ぎることや同時代の大規模な方丈建築、例えば秀吉が母大政所の病氣平癒を祈願して大徳寺山内に創建した天瑞寺(1588年)との比較などから8室形式をとる。いま6室形式において北側・南側の右から5番目の柱で間仕切ると前後4室ずつの8室形式の部屋割りになり、間仕切りで広い西側の部屋が室中となり、正方形に近く、他の方丈建築との平面形状と近いものとなる。すると、室中の襖絵は中央が4枚(各幅117cm)と左右各2枚(各幅140cm)、東西は各6枚(各幅166.7cm)となる。東西各6枚の襖絵のうち図の薄(すすき)が風に吹かれて向って左から右へ仏間に向って靡き、土坡が左から右へ向って徐々に下っていく本図が西側に、そして「金地著色松に草花図床貼付4面」の襖4枚が東側に配され、薄・土坡が

<sup>2</sup> 梶川敏夫「祥雲寺客殿発掘調査の成果から見た智積院障壁画」『障壁画の視点』仏教美術研究上野記念財団、1996年

<sup>3</sup> 小沢朝江・田口紗央里「祥雲寺客殿の平面と障壁画の復原検討—智積院障壁画と発掘遺構を中心とした検討—」(日本建築学会計画系論文集 第597号) 2005年

本図と逆に右から左への流れで構成される。本図の床貼付上辺の松の枝は復元では、襖6枚のうち右から5、6枚目の上辺に配置され、東西襖絵の大きな松が部屋の対角線上に配され、枝を左右に広く伸ばし、室中全体を覆うように広がっていく構成になることが建築模型によって明示される。

以上の通り想定復元模写において、不自然な所がある赤い蔦の葉が除色され、「金地に白と緑」を基調とする桃山期の大画面における彩色美を視覚的に見て分かるように再現されたことは大いに評価されてよいであろう。

#### (作品審査結果の要旨)

祥雲寺客殿に長谷川派により描かれていた障壁画は、従来の規模をはるかに超える大規模な作品であったと考えられているが、1682年の護摩堂からの出火により客殿が焼失してしまっているため正確な寸法や枚数等の結論が出ていない。幸いにも障壁画は持ち出され災いを免れたが、その後焼失した客殿の再建は行われず、大書院の南廊下に置かれやがて智積院宝物館に収められる事になる。

本研究の目的は、様々な部分の検証を行い欠損部を補い作家の目を通して切断された壁面を再構築することにより、障壁画の大きさから祥雲寺客殿を再現させる事にある。先ず画面右下方にある引き手の跡に注目する事により、この障壁画は元々襖絵であった事の根拠になる。そして、様々な部分で切り継が行われている事が分かる。

- 1 松図上部の金雲が分離しており、後に金雲を貼り付けている。
- 2 宸殿の違棚に松の根元に群生する芙蓉の図が本図と共通している。
- 3 和紙の紙幅の切継跡がずれている。
- 4 塾欄調査により新たに複数の改変跡を発見する。
- 5 その他様々な個所から切断された部分が見つかる。

しかしながら欠損部の全てが揃ったわけではなく、その部分に於いては作家としての洞察力を参考にして補っていく。これらを組み合わせて再現する事により襖絵の大きさの全体像を割り出す事が可能になる。今回の研究の発端となった一因が、現在智積院宝物館内に展示されている本作品が、他の作品に比べたっぷりとしている点を感じとった所にある。松の枝ぶりの堂々とした格調や黄芙蓉の豊かに咲き誇る美意識の復元に成功している。本研究にあたり修士課程で行った現状模写から感じ取った感覚と経験が博士論文で実証された事は大変な成果である。また今回制作した建築模型により当初は6枚の襖絵の内の3枚である点にも言及できた点は、想定復元模写の成果として評価できる。

#### (総合審査結果の要旨)

安原成美さんの研究は、桃山時代を代表する金碧障壁画である旧祥雲寺障壁画「松に黄蜀葵及菊図」の図像復元である。旧祥雲寺障壁画は、長谷川等伯が台頭した時期に一派が取り組んだ大作群で、度々の災害を乗り越えて今日に伝世してきたものの、画面の切り詰めや改変があり、本図は最も改変による図像の錯綜が著しい作品である。

安原さんは、美術史分野における先行研究を踏まえつつも、改めて原本調査による詳細な観察と画像撮影を行って、欠損や錯綜の具体的な状況を明らかにした。この調査と結果の読解には、絵画修復の経験や知識が十分に活かされている。新しい調査結果は、先行研究で示された復元図案を一部修正するものとなっている。

安原さんは、新たな復元図案を提示するにとどまらず、卓越した模写技術によって自ら復元図案を古色復元模写によって実体化させた。復元模写は、高さ約320cm×幅約516cmの原寸大で、同一素材で描かれ、襖形式に仕立てられた。これは「松に黄蜀葵及菊図」の半分であるが、それでも圧巻の大きさと説得力に溢れるものとなった。原本の現状と復元図との最も大きな違いは、原本の現状で縦に積みあがっている松樹を二股の横並びに修正した点である。これによって、襖絵に特有の横方向に広がる空間が回復された。さらに、綿密な調査によって細部まで復元された「松に黄蜀葵及菊図」からは、堂々と聳える二股の松樹と風にたな

びく草花の対照的な様相が現れた。これは、原本の現状からでは感じ取れない長谷川派の情趣といえる。つまり、安原さんの研究は、図像の錯綜によって長らく感得することができなかつた長谷川派の絵画世界を復元模写によって感得できるようにしたという点で高く評価することができる。

復元模写によって示された画面内の風や情趣は、旧祥雲寺の室内装飾全体を考える上でも重要である。ひいては、発掘調査を経ながらも未解明部分が残っている旧祥雲寺の建築自体の推定にも関わる。従来、古典絵画の復元研究は、画面内の問題に終始する傾向が否めなかつたが、絵画という部分の復元が室内空間の復元や建築空間の復元に関わる安原さんの研究は、絵画と建築が切り離せない障壁画の研究として注目に値する。さらに、卓越した画技によって、その方法論を実践した成果は大きく、博士（文化財）の学位に相当すると判断する。